



# 生ごみの有効活用、次のステップへ

恒例のゼロ・ウェイスト勉強会は生ごみ再資源化の今後を考える市民で盛況

2009年11月21日(土)13時より健康福祉会館にてゼロ・ウェイストの勉強会第5弾「生ごみの減量化及び資源化をめざしての市民集会——生ごみの有効活用に取り組んでみよう会」が開催されました。

当日の会場は大変盛況。遅れてやってきた参加者のために会場後方に椅子が追加されるほどで、最終的には200人以上の参加者を数えました。

## インセンティブとEPRを提案する基調講演

石阪丈一市長の開会の挨拶で始まる恒例の勉強会、今年度はまず、瀬戸昌之氏(東京農工大学名誉教授/NPO法人有機農産物普及・堆肥化推進協会理事長)による基調講演、「なぜ生ごみを燃やしてはいけないのか」でスタート。瀬戸氏は、生ごみの堆肥化、家庭ごみの再資源化の努力にインセンティブを設ける必要性を強調するとともに、EPR(拡大生産者責任)に基づいた公正な経済活動と環境活動を可能にするため、さまざまな団体から政府へEPRの実現を訴えかけることが提案されました。



生ごみ堆肥を使った畑づくりの報告

基調講演にひきつづいて、市村繁幸ごみ減量課長による生ごみ堆肥化への助成制度の説明があり、そのあとでいよいよ、生ごみ堆肥化の実践報告が市内各地域で堆肥化に取り組んでいる有志によっておこなわれました。有志のひとり、ハチドリ教室の活動でも知られる、響きの丘町内会環境委員長の黒津一子さんは「戸建て生ごみ堆肥化に取り組んで」と題した報告のなかで、生ごみの堆肥化にくじけそうになったときには茶話会などお互いの状況確認や情報交換をすることで挫折をできるだけ防ぐ秘訣に触れました。後述するグループ別討論のなかでも、「生ごみの堆肥化に努力しても、がんばりすぎて孤立感を感じると脱落してしまう」といった経験や、市内でまだ広くは浸透していない生ごみ堆肥化の実践にあたっては、孤立感をなくすために実践しているひとたちが相互に連帯を持つ工夫が必要であるといった意見が聞かれました。

## 実践報告とグループ別の討論から多数の貴重な意見

休憩をはさみ、勉強会はグループ別の交流会〔討議会〕へと移行。4つのグループに分かれ、「町田市助成制度を知りたい」、「生ごみを上手に土に戻すには」、「大型生ごみ処理機を導入するために」、「生ごみの全量資源化の実現のために」というテーマで、参加者全体で意見交換をおこないました。各討議グループは、それぞれのテーマについて話が尽きないという様子で、討論の終了を促す合図を送っても、参加者の話し合いがなかなか終わらないほどに、会場には熱気がこもりました。ごみ減量連絡協議会の中村達郎氏は「誰がやるのか?…市でやるから、ではいけない。私たちが考えないと。」と、市民から動きをつくり、積極的に行政に働きかけていく必要を力強く述べました(最終面につづきあり)。(取材・文章:編集担当補佐 向谷有加)



会場を埋める多くの参加者

休憩をはさみ、勉強会はグループ別の交流会〔討議会〕へと移行。4つのグループに分かれ、「町田市助成制度を知りたい」、「生ごみを上手に土に戻すには」、「大型生ごみ処理機を導入するために」、「生ごみの全量資源化の実現のために」というテーマで、参加者全体で意見交換をおこないました。各討議グループは、それぞれのテーマについて話が尽きないという様子で、討論の終了を促す合図を送っても、参加者の話し合いがなかなか終わらないほどに、会場には熱気がこもりました。ごみ減量連絡協議会の中村達郎氏は「誰がやるのか?…市でやるから、ではいけない。私たちが考えないと。」と、市民から動きをつくり、積極的に行政に働きかけていく必要を力強く述べました(最終面につづきあり)。(取材・文章:編集担当補佐 向谷有加)

## 第76号目次

生ごみの有効活用、次のステップへ	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(11)	渋谷 謙三 2
玉川学園『わが街 80年まつり』と3丁目子ども広場の彫刻展	大橋 成夫 5
NPO法人「まちだ結の里」を設立しました	岩上 誠次 6
事務局だより・編集後記	8

渋谷 謙三

■新しい計画・「考えながら歩くまちづくり」の始まり

青山市政が最後の年に作り、次期市長にその実現を託そうとした町田市の通称「70年プラン」は、新しい大下市長に「根無し草」のレッテルを貼られてお蔵入りされてしまったことは前号で述べた。その仕事に精魂を込めたという想いが強かった企画課の職員たちに、再び計画づくりの仕事をさせるのは、係長の私としてもとてもつらいことだったが、仮に担当するにしても十分な成果を挙げられる見通しも自信も無かった。

しかし、団地白書で弾みがついた新市政の中枢幹部周辺には、ごく僅かな職員の私的感情などに拘る人などあろう筈も無く、準備はお構い無しにどんどん進められた。

●向坂、森戸両氏の指導体制を再び望む

そんな私たちにとってのせめてもの救いは、引き続き向坂正男先生の指導を仰ぐ機会が与えられるという大きな期待感だった。私は観念した。ならば少しでも条件を整えようと考え向坂先生に相談した。『先生お願いします。今度の計画の仕事は現状の事務局体制では、とても荷が重いと思います。また、森戸先生にも指導がいただけるように考えていただけませんか?』

作業の責任者に異存のある筈は無く、先生は二つ返事で協力を約束してくれたが、真っ先に紹介者の東大の本城教授に相談して断られてしまった。『渋谷君、残念だが森戸君は特に大学に残って欲しい男なのだそうさ』という向坂先生の言葉が返ってきた。しかし私は諦めなかった。企画課長に相談し市長に内諾を貰った上で、イチかバチかご本人に直訴に及んだ。『いいですよ』とまるで他人事のような返事を頂き、嬉しさと驚きで腰が抜けそうだった。話はスムーズに進み、企画部の囑託で週三日の勤務、とりあえず2年間の契約だったと記憶している。役所はずるくて肝心の話はいつも最後、これは今も昔も変わっていない。『囑託料も十分にお支払いできないと思いますが、それでもいいですか?』と聞くと『自分は今、投資しても勉強する時だから』と、びっくりするような快諾の言葉を頂いた。幸運にも、私はこのようにして、再び仕事への意欲を回復させてもらうことができた。

町田市の新たな長期計画づくりは、先ずはこうして向坂、森戸の両先生を中心とする指導体制が固まり、次にはお二人の幅広いネットワークによって、「町田市長期計画策定特別委員」(別表)の方々が委嘱され、全庁的な職員参加、部門別課題への市民参加、

別表 町田市長期計画策定特別委員 (敬称略)

氏名	摘 要
◎向坂正男	日本エネルギー経済研究所長
○日笠 端	東京大学工学部教授
戎能通孝	東京都公害研究所長
柴田徳衛	東京都企画調整局長
水田喜一郎	日本開発構想研究所理事
原 定繁	全農協連合会企画室長
福土昌寿	経企庁総合研究開発調査室長
飯田正明	日本開発構想研究所
和田八東	立教大学経済学部教授
森戸 哲	町田市企画部囑託・事務局

地域のまちづくりへの住民、職員参加などの試みとそれぞれの実験への専門家のアドバイス参加などが、段階的に繰り広げられていくことになった。

それらの活動は、後に総称して「考えながら歩くまちづくり」と呼ばれ、全国の自治体関係者に多くの注目を集め、それまでの市町村計画ではほとんど言及されなかった地方自治体としての市民と行政のあり方の核心に触れる町田市独自の多彩で個性的なまちづくりの実験活動論が展開されたわけである。

ここで、常にその計画づくりの中心にあった向坂先生が、後にその活動を振り返って或る会報誌に寄稿された回想文をご紹介します。町田のまちづくりへの関わり、先生の市役所のあり方や危惧がわかりやすく書かれていて、まことに興味深い一文である。

## 町田のまちづくりと私

向坂正男

(参画協会「参画」11号より ※参照)

### ○人間のための都市づくり

先日、ある会合でドイツの若い建築家に会いました。デートリッヒという36歳の人でミュンヘンにいまして、都市計画を考える市民連合の事務局長をやっているんです。この方は日本に大変期待して来たと言うんです。東京へ来てみたら、アメリカの真似をした建築物ばかりで、住宅は全く機械的な無味乾燥なコンクリートの家の塊りの



市民とまちづくりを語る、在りし日の向坂正男先生

ような巨大な団地を作っているので大変がっかりした。それでそういうところは見向きもせず、新宿歌舞伎町や池袋や渋谷の盛り場、岐阜高山の町並みや白川郷の昔の日本家屋を大変興味をもって見てきたそうです。彼をよく知っている人たちに聞くと、社会的ないろいろな人間の気持ちの変化、ほんとうに人間の住まいとは何なのか、人間のための都市とはどういうあり方がよいのか、根源にさかのぼって、もっと人間らしい都市を再構築する道はどのようなところにあるのか、大変苦勞して追い求めている人だそうです。

### ○町田のまちづくりと私

私は、町田のまちづくりにこの4、5年参加しています。余暇の活用としてやっているので時間的に限界があって、なんとなく中途半端になってしまう。これを本当にやりだしたら、市長選挙にでも出なくてはならないかと思うようになりますね。私は元来役人で、昔は「経済白書」を書いたりして、日本経済全体のマクロのことをいろいろやっていたんです。町田には20年くらい住んでいるんですが、そのうちの15年間は全く寝に帰る処であって、街のことには何も関心が無かったんですけれども、町田市のことをやってみようかという気になったのは、5年ほど前でしたが大下市長から団地問題を中心にした「市政白書=団地白書」を作る指導を頼まれたのがきっかけでした。私はその時、話は大きくなりますけれども、明治百年以来の中央集権的なや

り方で住みよい国土は出来ないのではないだろうか。もっと地方自治を本物にすることを考える必要があるんじゃないか。「経済白書」などマクロなことをいろいろ書いてみても、地域的ないやゆるミクロのコミュニティの問題を知らないで、マクロの経済政策などを偉そうに論じられるのだろうか。そういう反省もあったわけです。要するに、町田でまちづくりのことを市民の目や手で考えていきたいというのが私の考えでした。

### ○考えながら歩くまちづくり

「団地白書」づくりは、作業リーダーの渋谷謙三君を中心に市の若い職員 16 人を集めたプロジェクトチームで始めたわけですが、市の企画課に集まった職員たちはやる気もあり、能力もあり、私は、市役所にこういう人間たちがいるとはおよそ期待もしていなかったんですけども、そういう人間がいたということは大変な喜びでもありました。それから引き続いて長期のまちづくり計画を作ることも頼まれました。事務局はやはり企画課になりました。専門家も大勢に増やしてもらって、事務局の企画には森戸哲君にも入ってもらうことにしました。そしてみんなといろいろ話し合って、「考えながら歩くまちづくり」という標語にしようじゃないか。つまり職員と市民と専門家の三者で一緒に考えながら、市として、行政としてやるべきことや、市民として組織をつくって動くべきことはどんどんやっつけよう。それを称して「考えながら歩くまちづくり」と呼んだわけです。

### ○市民のための市役所—その体質改善こそ急務

計画を考えていく過程で、市民のお祭りや「ひなた村」といって音楽と遊びを通じて子供の創造的な教育をしようとする企画が生まれました。また、市とは関係ありませんが「ポニークラブ」という青年のボランティアを集めて子供をポニーに親しませようというような企てもあります。「花とみどりの会」というような並木を植えたり道路に花を植えたり、花壇コンクールをやるといった市民の集まりも出来たんです。そういうことがいろいろあったものですから、新聞やテレビなどでも報道されて、町田はいろいろすばらしいことをやっていると言われてるわけです。しかしそういった一種のイベント主義でやってきたことは、やはりある限界に到達しつつあります。基本的には、市民が本当に参加したまちづくりにすることは、この行き詰まりをどうやって打開していくのかにかかっているともしえるわけです。その障害は何かというと、いくつかありますけれども、市役所が本当にサービスする気持ちになるかどうかであると思います。

市役所には、市民参加などといって市民がいろいろ行政に口を出すようなことは厄介だ、かえって能率が落ちる。よけいな手間をとらせる、という気持ちがある。一般の職員だけでなく、むしろ幹部の人たちにもやはりそういう気持ちがある。市民参加など手間のかかる、能率が落ちるようなことはあまり欲しくない、というのが本音ではないかと思えます。町田でも、市長以下幹部や窓口まで、本当に徹底しなくてはいけないのですけれども、そういった楽しいまちづくりに職員としてできるだけの知恵と、市民の手を握ってやっつけようというような気持ちは、なかなか出てこない。そこを突破しないと、いくら市民参加と叫んでみても、まちづくりには限界があると思います。(向坂回想文・終) ※参画協会:川喜田二郎、井深大氏らが設立。渋谷も運営委員だった。

## 玉川学園『わが街 80年まつり』と3丁目子ども広場の彫刻展

1929年(昭和4年)の4月、教育者である小原國芳氏によって創設された玉川学園。この学園に端を発するまちの歴史も2009年の今年で80年を積み重ねるに至り、玉川学園の各地では80周年を記念した『わが街 80年まつり』が行われています。そこで本紙は、当地在住の大橋成夫会員より、まつりの経緯について寄せていただくとともに、3丁目子ども広場に11月7日(土)~15日(日)の期間でおこなわれた彫刻展の様相を取材しました(紙面構成・取材：編集担当 井上弘貴)。

### 『わが街 80年まつり』の経緯

会員 大橋 成夫

10年前の1998年春、玉川学園地域を考える住民懇談会(現在活動休止、以下では住懇と略す)の月例会の際に「まつり」をやろうという意見が出て、一気に盛り上がりを見せた。これが「70年まつり」の発端である。昔からの街ではないこの地域では伝統的な祭りは無理ということもあり、むしろ地域住民の交流を図っていく祭りにしようということで、地域内の活動団体(町内会・自治会・商店会・文化センター運営委員会等)へ働きかけて実行委員会を立ち上げた。実質的には秋たけなわの頃から動き出した。町内会の支援も決まり、トップ事業として、また、まつりのプレとして12月中旬に子ども向けの「クリスマス会」を町内会主催で開催した。子どもたちに、胸につける「70年まつり」のシンボルバッジを配り、来年度から始まる「70年まつり」をアピールした。1999年、その年一年間を「70年まつり」と位置づけて各種団体の行事を協賛事業とした。広報物(ポスター&チラシ等)にはシンボルマークを刷り込み、各行事の当日には会場に幟旗を立て、「70年まつり」をアピールした。

さて、「わが街 80年まつり」は、2007年秋ごろ、またまた住懇の有志の呑み会で話が出て、反対もあったが有志数人が賛成した。2008年2月に大橋がまつりの企画案を作成して、町内会長に提案した。6月ごろまで回答がなかったが、「玉川学園地区まちづくりの会」のメンバーを中心に、各団体の有志(7名?)が集まり、とにかく進めようとした。その間にまつりの資金確保が問題になり、東京都の地域活性化助成金制度に町内会中心で申請することになって、やっと玉川学園町内会・自治会連合会も重い腰を上げた。本年2月頃に有志が集り世話人会が結成され、実質的に動き出した。まつりの期間を4月から2010年3月と定め、2月中旬ごろから



始まった「玉川学園小さなギャラリー会」の「雛めぐり」は、その一番目のイベントになった。

2月、商店街には、「わが街 80年まつり」の幟旗やフラッグがはためいた。さあ!「わが街 80年まつり」が始まった。何時の時代でも“まつり”“アート”は、人々を集め、人々を感動させる。そして感動は共有され、

人々を交流させコミュニケーションさせる…。

### 3丁目子ども広場の彫刻展

このような準備のもとでおこなわれている「わが街 80年まつり」。11月1日(日)から8日(日)は企画展、10日(火)から15日(日)は公募展の「ギャラリー ウォーク 2009」も開催され、17のアトリエと10のカフェやレストランが参加。今回の新しい試みとして、3丁目子ども広場では7日(土)~15日(日)の1週間、彫刻展が開催されました。小野路で共同アトリエを設け活動している彫刻家たち有志の作品が、また、駅前花壇や数軒の住宅・ギャラリー前には玉川大学学生有志の彫刻や陶芸作品が展示されました(左の作品は、長谷川千賀子氏の「海の呼吸」、右の作品は前田忠一氏の「MON」)。



## 地元農家・市民・行政の三者協働による里山再生を目指す NPO 法人「まちだ結の里」を設立しました

岩上誠次

日本の美しい里山風景は、すべて農林業など人手により維持されてきたものです。

町田市の北部には、ご承知のとおり、東京近郊では稀有で広大な緑農地域（約 970ha）が広がり、「町田市長期構想」でも、大下市政以来、緑の保全・都市農業の確立を掲げ、市街化調整区域に指定し、保全してきた地域です。（注1）

町田市は、2004 度の組織改編で、「環境・産業部 北部丘陵整備課」を新設し（担当部長も配置）、2005 年 3 月、「北部丘陵まちづくり基本構想」（農とみどりのふるさとづくり）をまとめました。（次ページ土地利用区分図参照）

また、2005 年 10 月、2007 年 2 月及び 2008 年 2 月の 3 回に亘り、市民ボランティアを募り、区分図中央に計画している「奈良ばい谷戸田再生地区」（約 20ha）において、地元農家の指導による伝統農法を用いた体験農業学習会を開催しました。（注2）

この主旨に賛同・参加した市民たちは、水田の再生や樹林地の整備、収穫までの農業年間行事を通して、地域の歴史や環境を学び、また、町田市の要請もあり、2007 年 3 月、市民団体（奈良ばい谷戸に親しむ会）を組織し、地元農家とともに市民の手による農的環境の再生・管理を行ってきました。更に、この地域の緑地保全を、そのノウハウを生かし、より積極的に協力推進する担い手として、法人格を取得することが望ましいとの市からのサジェスト（注3）もあり、この度、NPO 法人を設立することにしました。



（写真）開墾により再生した田んぼ（奥には未開墾地が見える。）

## 《私たちの活動》

永年、耕作放棄され、大型雑草や柳などの樹木が繁茂した田んぼを人力で開墾再生し（注 4）、稲作を行い、その周囲の樹林地の整備を行ってきました。放置された自然に手が入ることで、動植物の多様性が維持され、より鮮やかな季節の移り変わりを体験することができます。このように農的環境が持つ魅力を、管理と同時に、恵みを楽しみ、楽しみながら仲間の輪を広げていきたいと考えています。

《活動日》 土曜日・水曜日

《交通》・町田バスセンター（12 番のりば）「町 31 系統・多摩丘陵病院行き」25 分

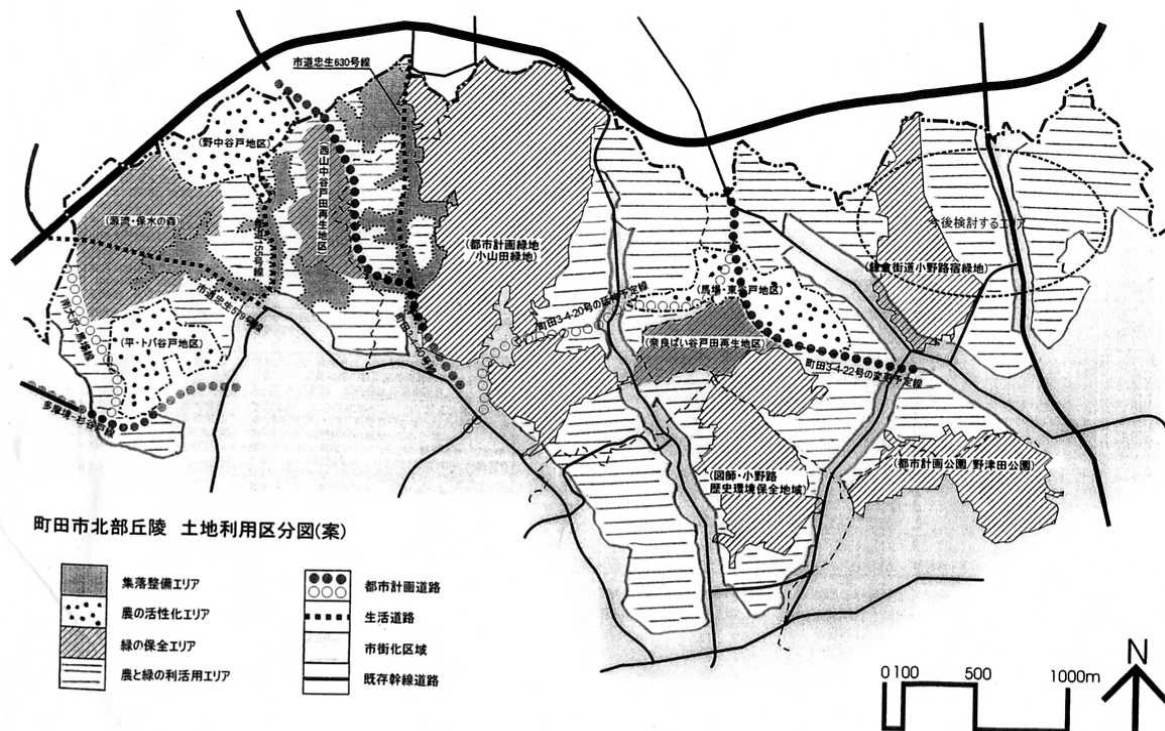
・京王・小田急多摩センター駅南口（11 番のりば）「43 系統・日大三高行き」9 分

「扇橋」バス停下車徒歩約 4 分

《URL》 [http://outdoor.geocities.jp/machida\\_yuinosato/](http://outdoor.geocities.jp/machida_yuinosato/)

\*\*\*\*\*

### 町田市北部丘陵 土地利用区分図（案）－町田市－



\*\*\*\*\*

（注 1）しかし、バブル期には、長期計画に反比例して、この地域に、住宅・都市整備公団の土地区画整理事業による 2 地区 380ha の開発を誘導し、公団では 94ha（25%）の用地買収を行いました（平成 5～9 年）。

ところが、小泉政権の方針により公団開発撤退。その後、公団取得地を町田市が肩代わり取得しました。

（注 2）市民指導は、市からの委託による「町田歴環管理組合」。同組合は、「にほんの里 100 選」に東京都内から唯一選ばれた「国師小野路歴史環境保全地域」を復元し管理している地元団体です。

（注 3）町田市中期経営計画では、その重点事業の一つとして「地域の緑地が地域住民の手で守れるように協力団体を育成し、緑地を保全します。」と約束しています。

（注 4）谷戸田（沼田）のために、膝まで水に浸かり、重機が入らないため、開墾作業は全て手作業。

## 事務局だより

定例会のおしらせ

・2010年1月の定例会は慣例では1月6日(水曜日)中央公民館ロビー 13:00～になります  
が、新年ということもあり変更の可能性があり  
ます。変更の際はメール等であらためてご案内  
申し上げます。

(一面からのつづき)

まとめとしてふたたび壇上に立った瀬戸氏は、グループ別の討論を見てまわった感想として、「町田の人がこんなに遅くまで熱心に議論されている…しかもおもしろく、楽しみながら実践しようとしてされている」ことをどの討論グループからも強く感じたと述べました。また、堆肥化の取り組みの途中で脱落してしまうひとが出るのを防ぐためにも、連携しながら堆肥化を継続できるようにするためにも、登録制のアドバイザーを置くというアイデアに触れました。

ふりかえれば、もったいない精神で「ごみゼロまちだ」をつくろうと題されたごみゼロ市民会議の五つの提言のひとつとして「家庭生ごみの全量資源化を計画的に進める」が盛り込まれ、町田市中期経営計画の重点政策プランのなかにも「家庭生ごみの全量再資源化を進めます」(重点事業 2-1-1 再資源化推進のひとつ)が書き込まれたものの、市民を中心とした町田市全体の生ごみ堆肥化の未来像はいまなお見定めがたいものがあります。その意味で、ごみゼロ市民会議の提言書にある「市民の堆肥づくりの啓発・普及を、町内会・自治会連合会、廃棄物減量等推進員をはじめ市民団体の協力を得て行うとともに、堆肥化の知識や技術を持つ経験者市民の参画を得て、地域住民と密着した各種の要請に応える体制」をあらためて実現するためにも、今回の勉強会は意義深いものだったと思われま

## 編集後記

今月号はごみ減量連絡協議会の主催によるこの時期恒例のゼロ・ウェイストの勉強会の模様をトップ記事でお伝えしました。おなじく11月の22日には九州は熊本県の水俣市が「ゼロ・ウェイストのまちづくり水俣宣言」をしたというニュースも飛び込んできました。その宣言文のなかでは、「日本中・世界中の自治体と連携するゼロ・ウェイスト」を目指すということがうたわれているとのことです。ゼロ・ウェイストのまちづくりにかんして町田はなかなかペースがあがらず、関係者の中にはやきもきする声が多くありませんが、今回の生ごみの有効活用に取り組んでみよう会が来年に向けての町田発のゼロ・ウェイストの起爆剤になればと思います。



玉川学園の3丁目子ども広場の彫刻展。全景はこんな感じでした。手前はいしばしめぐみ氏の作品「ぼくたちのきおく」です(H. I.)。

### まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報  
2009年12月2日第76号発行  
発行者 佐藤東洋士  
編集責任者 井上弘貴  
事務局 常盤町桜美林大学内  
TEL 042-797-6947  
E-mail hiro\_inouye@yahoo.co.jp